

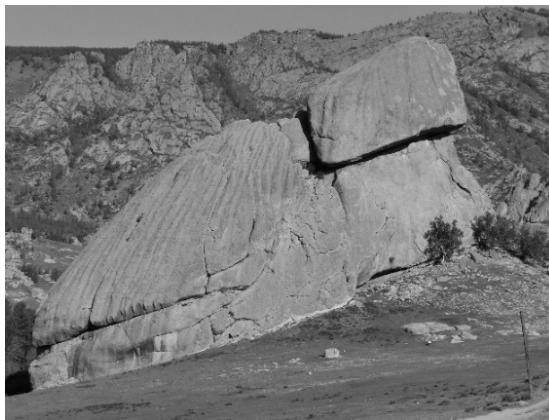
生命の異系——モンゴル

河本英夫（文学部）

キーワード：小ゴビ砂漠、ゲル、遊牧、ノマド

低い尾根が交互に入り組んだ盆地は一面の薄い草原である。深い緑ではない。地肌とまばらな丈の低い草が混ざり合っているメッシュ状草原である。湿気はほとんど感じられない。通り過ぎる雲が時折にわか雨を降らせるのだろう。地面は、天空のしずくが下りたようにいくぶんか湿り気を帯びている。その高原のなかに、巨大なタケノコのような岩がいくつもある。密生するタケノコ状の岩があれば、ポツンと一つだけ地面に生え残ったような岩もある。モンゴルに着いた翌日の朝の風景である。単独の岩は、遠い位置からの視界のなかに見えるので、通行する人たちにとってランドマークであったに違いない。東西南北からも見え、位置の指標となっている。そうした岩には、名前が付く。「亀石」である。高さは30メートル前後だろうか。その下で休むこともできれば、岩に登ることもでき、岩に登ればそのまま登ったものが行方不明になるような雰囲気である。人隠しのような情感がある。喚起力のある岩である。

地形の形成で見れば、地表面まで盛り上がった火成岩が気の遠くなるような年月をかけて削られ、単独の不連続な岩となって残ったのだろう。火成岩のなかで強く圧縮を受け、高温で濃縮されたものが岩であり、粉々になったものが土や砂である。そうなるや岩のなかにも、さまざまな特性が出現する。内部に空洞ができ、岩のなかの隠れ家のようになったものもある。生活のなかで周辺に、身を隠す場所を確保しておくのは、動物の習性である。まったく隠れる場所のない所には、動物は暮らすことができない。雨露をしのぎ、外敵から身を守り、ひ弱な子供たちを隔離するには、隠れるのがよい。文化的な隠れが、隠居である。岩にとっては、この地下蔵で動物が大量死しようが、人間が虐殺されようがまったく頓着がない。



亀石

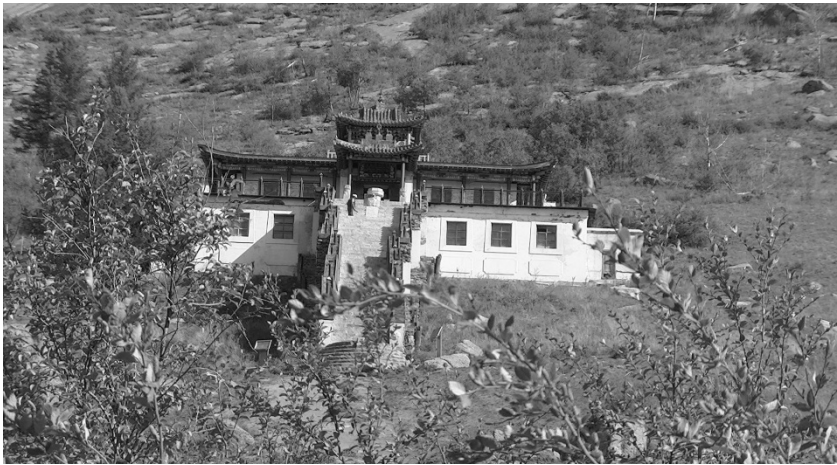
亀石から数キロ移動したところに、格好の隠れ家となるような岩があった。そのなかには 80 名以上の人が隠れることができるほどの地下壕がある。そこに宗教弾圧を逃れようとするチベット仏教の信徒が隠れこんだことがある。1930 年代後半のことである。この信徒たちは、ソビエトによる共産主義施策には簡単に従わない。世界観レベル、人生論レベルの信念を持つ人たちを、自由に制御できるような政治的言説も制度も存在しない。国家的なマネジメントや経済の集団化(私的所有権の剥奪)程度の政策では、生活にまで入り込んだ世界観を打倒することは無理である。そこから大量虐殺までは、わずか数歩である。そしてこの岩のなかに隠れこんだ信徒たちは、実際、虐殺された。

こうした岩の密集の度合いはさまざまである。30 メートルから 50 メートルほど隔てて、いくつもの岩が弧を描くように斜面に密集しているところがある。その麓の比較的平らな場所に、観光客用に作られたテントの家である「ゲル」が設定されている。移動用ではないので床が張られており、宿泊用に大き目に作られていて、六角形のゲルの入り口を除いた各辺に 5 つのベッドが置かれている。一日目の宿泊は、このゲルである。ほとんど明かりの無い斜面に 30 近くのゲルが設営され、中央付近の大きなゲルが、レストランである。真夏であったが、ゲル内のストーブで運営スタッフが薪を焚いていた。夜半には冷えるのだろう。真っ暗な夜道を延々と移動してそこに着いたものだから、指定されたトイレの位置はもうわからなくなっている。夜半寒くて、2 度目が覚めた。高度は 1500 メートル程度はある。都市の潜熱のようなものはまったくなく、標高に見合うだけの冷気である。夜中に目が覚めたのはトイレのシングルである。指定された建物まで暗闇に行くことは無理である。ゲルから出て、ゲルの傍の草むらに長々と放屁した。ゲルのなか以外は、実質的にすべてトイレである。ヤギやヒツジや馬の糞が到る所に広がっているのだから、事実上もトイレなのである。

1 草原と岩と都市

モンゴルは日本との時差は 1 時間で、夏季のサマータイムで 1 時間繰り上がっているため、時計の訂正はない。朝 6 時半頃に明るくなり、緯度のせいで夏の夜は 10 時近くまで明るい。翌日はきっと晴れているだろう。朝起きると同行の稲垣諭さん、研究助手の岩崎大君は、すでに岩登りを開始していた。左前脚をつくことのできない犬が、足元にじゃれついている。このゲルの集落に住みついているのだろう。岩と草原が続くこの一帯が、テレルジ国立公園である。そのなかには韓国系のゴルフ場があり、また観光用の乗馬の場所があった。内陸のため水が多くあるとは思えない。この国立公園の端っこに小さな川が流れていて、川原はキャンプ地であり、ゴミの集積場である。それでもゴミは少ない。ゲルとはゴミの少ない生活のことである。遊牧や移動のためには、捨てていくものがわずかでなければならない。定住とは自分で集め、自分で作り出したゴミに拘束されることである。ゴミに縛られて生きる。それが都市の実像なのだろう。レストラン・ゲルで出された朝食も昼食も過不足ないほどの美味しさだった。美味しさを押し付けるようなものは何もなく、また欠落があるというのでもない。過不足のないバランスというものがある。

国立公園は、保護施設であり、むやみに動物を捕獲したり、植物を伐採したり、ゴルフ場を開発することはできない。おそらく勝手に場所を占拠して住みつくこともできないのだろう。しかしそうした場所にも、かつての寺院は残っている。それが小高い山の中腹に建てられたチベット仏教の寺院アリヤバルである。山の中腹だからかなり登らなければならない。途中何度も休みながらようやく登った。そこでは子供を含めて大勢の僧侶が念仏を唱えていた。念仏は多くの場合長年の反復口承によってほとんどリズムのようになっている。もう少し念仏の内容がわかればと思うが、おそらく内容ではないのであろう。これは日本の葬儀や法要でいつも感じることである。言葉が音楽のようになっているが、岩崎大君のカラオケのような叫びではない。その儀式あるいは修行に退屈そうに飽きてしまっている子供の僧侶見習もいる。



アリヤバル寺院

台座には、108つ玉のつながった数珠があった。同行した坂井多穂子さんは、その玉を一つずつ撫でて、煩惱がすべて消える、と希望をもっていた。いったいどの程度間、煩惱が消えるのだろうか。人間の身体の不思議なところだが、煩惱が消えるために費やされた時間だけ、その先煩惱が消え続けるのかもしれない。筋肉を作るさいにも、作るために要した時間だけ、その筋肉は維持される。ということは煩惱も際限なく消し続けなければ、またたく間に戻ってくる。だから煩惱なのである。テレルジ国立公園で半日過ごし、ウランバートルへ移動した。この車のなかですでにおそらく坂井多穂子さんの煩惱は戻っている。煩惱とは生きていることの負の別名なのである。

ウランバートルは周囲を小高い山に囲まれた盆地であり、すでに十分に都市化している。急速に都市化したアジアの多くの都市と同じように、道路は車で溢れている。信号が少なく、一方通行での循環型道路交通網が造られていないために、車が流れるというかたちでの道路規制になっていない。そのため道路を横断する人たちは、横断歩道を渡るのではなく、車と車の隙間を横切るのである。日本でも田舎の道路ではしばしばみられる光景だが、それが東京都内以上の渋滞のさなかで起きる。この道路を最短時間で車で通過するためには、運転手には特異な技能と性格が必要なようである。今回のモンゴル内の移動では、旅行会社のH I Sが雇用してくれた運転手が付いた。この運転手は、妻みが

出るほどのパフォーマンスだった。前を行く車を強引に追い越し、横から入り込もうとする車のドライバーを威嚇して前に入れないのである。精悍な顔つきで、日焼けした手足に短パン、襟を立てたシャツ、そしてサングラスという出で立ちである。この運転手はこのタイプの道路のまさにプロであった。商店街、デパートの通りでは、「スリ要注意」という警告がガイドブックには載っている。確かにバザールでは夥しいほどの中国製品が売られており、たたき売り状態の店舗が延々と続いていた。ナラントール・ザハというバザールは中国からの物流で、物品はあふれるほど流入している。学校にあがるさいの制服は、こうしたバザールで購入しているらしい。もちろんデパートには化粧品、装飾品のような高級な商品も置かれている。

ウランバートルの小高い丘に登ると、一望にこの首都を見渡すことができる。マンション建設の大ラッシュである。一方では古いマンションを壊しながら、新たな設計のマンションを建て替えていた。マンションの周辺には、いまだゲルが残っている。上から見下ろすと、マンション群の隙間のテント村という風情である。移動を基本とするゲルと定住を基本とするマンションは折り合うはずもなく、やがてはマンション群に置き換わっていくように思われる。25年ほど前までは社会主義経済体制を取っていたのだから、マンションは所有ではなく、最長70年間の定住権の購入のようである。ロシアや中国の影響は経済面から見ても到る所に入り込んでいる。文化的にも、政治的にも、地政学的にもモンゴルはロシアと中国のせめぎ合いの場所であり、あるときは双方から「緩衝地帯」だと見なされて独立国家を維持し、ある場合にはどちらかに傾斜しながら、他方の国を「外交カード」として活用して、経済援助を引き出してきたのである。ロシアと中国の国境線は長い。国境警備のためには膨大な軍の人員が必要となる。しかし広大なモンゴルを間におけば、その分の兵員を節約することはできる。

小高い丘から見たウランバートル市の反対側の丘の中腹に、第二次世界大戦時の末期にロシアの捕虜となり、強制労働のさなかで亡くなった日本人兵士の墓地(ダンバダルジャー寺院)がある。この墓地には、日本の多くの国会議員が訪れ、献花している。海部俊樹氏が総理の時期に訪問し、戦後外国総理(大統領)ではじめてモンゴルを訪問した国の代表だと教えられた。国家もしくは国軍の命令でこんなところまでやってきて死亡した人たちの墓は集合墓地となり、一人一人に対応する植物を毎年植えていくという。そうしなければ区切りを付けられない過去があり、時間がある。



日本人墓地

遊牧民は移動を本性とする。物を携えた移動を交易という。そのためチンギス・ハンのように移動できる範囲を広げていくことは、大半は侵略でも征服でもない。なにか別のことをやっていた印象が残る。それを近現代史で見れば、帝国の樹立ということになるのだろう。遊牧の生活と都市化はそう折り合いの良いものではない。遊牧は、人口密度や物の密度を一定以上にしない仕組みでもある。ヒツジや牛が、特定の地域の牧草を根こそぎ食べてしまうほどの密度になれば、草地の回復にもコストがかかる。それを分散させる仕組みが遊牧である。他方都市は、密度を際限なく上げていく仕組みであり、密度効果によって新たなつながりが生まれたり、思わぬ副産物が生じたりする場所である。これを両立させることは本来無理である。モンゴルは、織り合せることが難しい二つの運動のモードが同時に進行している。

3日目には、ウランバートル西のフスタイ(ホスタイ)国立公園に出かけた。西に約90キロ移動したところであり、海拔がいくぶんか高く1800メートルほどある。途中、「ミニゴビ」と呼ばれるモルトソグ砂丘に立ち寄った。広さは東京ドーム5杯分程度だと思われるが、細かな砂が集まった砂漠状の場所である。地質上、ここに細かな砂がもともと存在していたとは考えにくい。周囲は、すべて草原であり、少なくとも網目状草原である。おそらく強い風が吹き、土が巻き上げられたときに、大きな土は均質に大気の下の方に大きさに応じて何段階にも層をなしている。細かな土は大気の上空まで舞い上がって砂状になり、風が通り過ぎた後になってゆっくりと落ちてきて、一定の大きさの砂だけが密集するそれによってこうした地形が形成されたと思える。大気の上空で砂を含んだ空気が集まるような地形的特質があるに違いない。風の集まる場所である。この広さだと実験を試みることもできない。それを地上付近で見ると、たしかにゴビ砂漠のような不思議な砂の地形が出来あがっている。とするとこの砂漠はいまでも徐々に大きくなっていることになる。



フスタイ国立公園手前

そこを通り過ぎて、土の凸凹道をさらに進むと、フスタイ公園のツーリストキャンプ場に到着した。キャンプ場には多くのゲルが並んでいる。国立公園に指定しておかなければ、開発、狩猟、資源略奪が横行しそうな場所である。ゲルの一つでこの国立公園の説明用のビデオ(DVD)を観た。多くの植物や野生の哺乳動物が生息しているようだが、人間の通り道からはごくわずかしみることができない。最も有名なのが、野生馬のタヒである。首の稜線に黒髪がなびき、細長い顔というよりもいくぶん丸っこい顔立ちである。世界中には幾種もの野生馬がかつて生存していた。馬は早くから家畜化されてきた動物である。そのなかで野生のまま生きてきた各種の馬は、ほぼ絶滅してきた。そのなかで例外的に生き延びてきたのが、タヒである。1890年代にロシアの探検隊がタヒをこの地で発見した。その情報はヨーロッパの博物学者、動物学者の関心を呼んだ。その後、捕獲され、ヨーロッパのいくつかの動物園に送られて、一時絶滅しかかった。そこから再野生化の企てが進むようになったのである。もともと生息していたこのフスタイの地に戻して繁殖させ野生種として生存させる企てである。現在300頭ほどに増えており、10頭単位の集団で暮らしているようである。山の頂上付近で草を食べている様子が、望遠鏡を通して見えた。暑さに極端に弱いらしく、夏は頂上付近で暮らし日没後水を飲むために山麓に降りてくるという話をガイドがしていた。



野生馬タヒ

この国立公園を抜け、川沿のゲルにたどり着いた。遊牧の生活をいまでも続けている住民のゲルである。遠くに放し飼いにしてある数百のヒツジやヤギの群れが見える。ヤギとヒツジと一緒に放牧するのは、長い間の知恵である。ヤギはエサに対する感度が高く、ヤギに牧草地を誘導させてヒツジの群れを動かすと、ヒツジの成長が早くなると言われている。またヤギは草を地下部まで食べ、低木の樹木まで食べてしまうのでヤギの比率は一定範囲内におさめなければならない。他方ヤギは比較的寒さに弱く、夜間にはヒツジと一緒に柵のなかに入れておくと、ヒツジを毛布代わりにして寒さをしのぐようである。ヤギの毛皮がカシミアで、ヒツジの毛がウールであり、カシミアの方が高額であるためどうしてもヤギの方が増えがちになるが、そうなれば草原を食い尽くす可能性が出てくる。そこでヤギを 20-30%に維持するような混成体を作るとちょうど良いと言われている。

このゲルの近くでは、数十頭の牛がのんびりと歩き、ゲルの方に帰りつつある。ゲルの近くには馬が一頭つないである。しきりに首を振り動こうとしているが、何をしようとしているのかよくわからない。真っ黒な犬が、2、3匹ゲルの陰でうずくまっている。電池は大型のバッテリーで保存され、衛星用のテレビは映る。日本の大相撲も見ることはできる。学校教育開始時には、都市部の寮に行くということであった。水は近くの小川から 4、5日に一度タンクに汲んでくる。その日の午後、トラックに乗って小川まで水汲みに同行した。このゲルのなかでご馳走になったお昼ご飯は、この小川から汲んだ水で作ったものであろう。美味しいことは美味しいのだが、夜半には水あたりの症状がでるに違いない。そして実際そうだった。

2 遊牧

場所を変えながら生きていくことは、根城や巢をもたないことである。根城や巢にしつらえられた財産はできるだけ少ない方が良く、物をもてば物に対する執着が生まれるが、執着は少ない方が良く。拠点はあってはならない。本質もあってはならない。実体もあってはならない。暑い夏がやってくるかもしれない、限度を超え、家畜が死滅するほどの寒い冬が来るかもしれない。困難はそのつど乗り越えていくしかない。そしてそうやって生きていくことが、一つの豊かさなのである。

ゲルから遠くに見えていた数百のヒツジやヤギは、小川に水汲みに行って間(約 30分)に、ちょうどゲルの反対側の遠方まで移動してしまっていた。移動の速さは驚くほどのもので、草を食べながら少しずつ場所を変える場合とは、異なるモードで移動したようである。この遠方のヒツジやヤギの背後にまわり、追い立ててみた。旅行ガイドさんが、一匹のヤギを掴まえて角を押さえてくれた。そして坂井多穂子さんがそのヤギと一緒に記念撮影した。

ヤギの鳴き声を真似てみると、その声に呼応して、同じように鳴き声を上げるヤギが出てくる。そのヤギの声に呼応して別のヤギやヒツジも鳴いている。何かは伝わっているが何が伝わっているのかはわからない。動作の呼応のなかで、何かは伝わるが、伝わる何かを限定し、特定しようとする、

そこに「意味」が出現する。意味とは、動作全体を動作の意図に縮小し、意図に対応づけた何かである。ここまではかまわない。事象を焦点化し、事象のエッセンスを取り出そうとすることは、思考の経済学にもかなっているからである。

問題はその先である。縮小した意図や動機から動作が引き起こされ、意図によって動作が制御される、という場面である。意図と動作の間には、どのような因果関係も動因-帰結の関係もない。意図は動作のきっかけとなり、動作の進行のさなかでの調整因子になることはあるが、動作に内在するものではない。そうすると意図や動作の帰結や意味は、動作そのものに並行する人間の作り上げたファンタジーであることになる。そしてそのファンタジーが人間であることの必要条件なのである。意図は、事象のエッセンスではないのだ。動作と意図はカップリングの関係だが、カップリングの本性にしがたって、ただ並行する場合から、カップリングの在り方を全面的に変えてしまう場合まで広範な変動幅がある。

その一つが意図や意図的制御によって、動作に力が入ってしまい、ぎこちなくなる場合である。力みが出てしまう場合である。他方リハビリの現場でときとして起きることであるが、硬縮によってまったく動かなくなった患者の足を外から手を添えて動かそうとしても、まったく動かないことがある。そのときセラピストが「私はあなたに何をしてほしいと希望していますか」と問うと、患者の経験が全面的に再編され、局面が変わってしまうことがある。いつもこうしたことが起きるわけではない。だが時としてこうしたことが起きる。外から添えられたセラピストの手の感じ取りの感触まで変わってしまうことがある。患者は何を活用して自分の経験を律すればよいかの手掛かりをあらためて手にするのである。意図は、こうした経験の再編の自己組織化の転換点になることがある。

遊牧する動物は、ほとんどの場合集団をなしている。草原のゲルでもたった一つのゲルは存在しない。最低でも近接する位置にもう一つのゲルがある。家族は異なるようだが、単独ということは何か無理が来ているという印象なのである。

動物が集合体をなすということには進化論的な理由もあるに違いない。遊牧する動物は、エサを食い尽くさないように一日にかなりの距離を移動する。このことは捕食動物に対して、位置移動によってターゲットの位置をずらし続けることでもある。そしてかりに捕食動物に襲われたときには、最も逃げ足の遅いものが犠牲になることで、他の集団のメンバーを守るのである。集合体とは、犠牲を最小にすることで、集合体そのものの機能性を維持することである。遺伝的な偶然によって集団の末端に位置するような動物は、一定の頻度で生まれる。アフリカの草原のシマウマは、集団の規模が小さくなり、ライオン程度の走力では簡単には捕まらなくなった。ライオンのオスは容易にはエサを採ることができない。ライオンのオスは顔が大きくて強そうだが、あの体型はエサを掴まえることに適したものではない。顔が大きすぎるのである。



ヒツジとヤギの群

遊牧するヒツジやヤギには、集団をまとめるような司令塔もしくはボスがいるようには見えない。集団は、密集したり、ばらけたりしていて、特定の集団の維持原理があるようにも見えない。それでも緩やかな集合体であり続けている。時としていろいろな偶然が重なって、メンバーがいなくなることもあれば、別の集団のメンバーが紛れ込んで、集団の成員が変わることがある。その最大の要因は、新たなメンバーの誕生である。

集合体を考えるさいに、人間が自明なようにおのずと活用してきた事例が二つある。一つは意識であり、意識はそれが作動するさいには、まるで一つの統合体であるかのように感じられる。もう一つは剛体であり、放置して雨露にさらしても簡単には壊れないのである。剛体は、均衡という事態を前景化した。たとえばカントの『自然科学の形而上学的基础』の動力学の部門では、内的活動として、引力と斥力が設定され、それらの釣り合いから剛体の維持が説明されている。引力が強すぎれば、剛体は収縮し、斥力が強すぎれば、剛体は膨張してやがてばらばらになる。そのため引力と斥力は釣り合っていないなければならない。しかも剛体という物体が感知されるためには、人間の感官になんらかの刺激をあたえなければならない。そのため斥力がもっとも重要だとカントは考えた。ただしたとえば眼に剛体が映るのは、光によるのであって引力と対抗している斥力によるのではない。また手で触って剛体が触覚的にわかるのは、大半は触覚的認知によるのであって、引力に対抗している斥力によるのではない。カントの設定した斥力を拡張解釈しなければ、カントの議論は成立しない。

もう一つの集合体の典型事例である意識は、分離という経験ができないので、どのような集合なのかも本当のところよく分からない。これは現在の意識研究でも事情は変わっていない。非集合性を経験できない集合性であるために、部分 - 全体関係での集合体ではなさそうである。部分そのものが緊密に統合されたような集合体で考えることは筋が違ふと感ぜられる。

そのため集合体のモードを考えるさいには、どうも典型事例が不足し続けている。ライプニッツがアルノーに宛てた書簡のなかで、組紐や寄木のようなイメージを描いているが、これらは配置と位置

の組み合わせだけからなる集合体である。統合する原理などは一切なく、部分相互の配置の関係だけで、見た目には緊密な統合体ができる。かつてのお寺には、釘を一本も使っていない建物があつた。ボグドハーン宮廷博物館も、こうした建築らしい。よほど腕のよい大工が造るもので、彼らは宮大工と呼ばれた。残念ながら私には宮大工の知人が一人もいない。ここでは統合する原理はまったく不要であり、いくつかの偶然の重なりで統合体はできる。

統合する原理がまったくなく、集合そのものの範囲を時に応じて変えていくようなゆるやかで自在な集合状態を描こうとすると、意識からは何か異物を描くようなかたちにならざるをえない。そこにドルーズが鮮明なイメージをあたえた。それが「ノマド的」(遊牧民的)という集合状態である。群れと統合体は異なる。要素を不可分に統合するという組織体のイメージを放棄する。なによりも共通の根拠を捨てて、統合する中心概念を捨てる。一切の「なくて済むもの」を軽々と捨てることができるのが、ノマド的であることの全般的な傾向である。

ドルーズの場合、初期からこうしたイメージは一貫している。灌木の集合体で根の繋がっていない仮想体を、ドルーズは「リゾーム」だと呼んだ。統合原理はまったくなく、にもかかわらず集合体でありうるようなモードを指定していたのである。

探してみれば、実際にいろいろなものが見つかる。馬糞に生えるキノコの一種は、乾燥した時にはサンゴのようなかたちをしている。ところがひとたび雨が降ると、個々の細胞がバラバラになって水を泳ぐように動き回る。そして乾燥してくるとまたサンゴのように一つの植物体に戻るらしい。連結水車のような事例は、動きの連動からなる。個々の水車は、ただ自分の運動を続けているだけである。その運動の余波が次の水車の運動につながる。次の水車もただ自分の運動を続けているだけである。しかし連結体として、水車は動き続ける。

こうしたゆるやかな統合体で、なおかつ統合体そのものを組み替えてそれじたいで別様になっていくような仕組みまで入れようとする、もう少し複雑な組み立てをしなければならない。そこに踏み込んだのが、オートポイエーシスである。そうなればもう一段階高次の組織体にはいつている。

遊牧は、いまだうまく定式化できていない仕組みを備えている。どの程度の面積もしくは密度までが許容可能なのか。密度が高くなりすぎれば、エサが不足する。移動によって次に戻って来たときには、もうエサが生えないようであれば移動の意味はなく、別建てでエサを用意し、柵に閉じ込めてヒツジやヤギを育てることになる。密度は、遊牧民的なサイクルの規定要因である。また降雨量と日照量は、草の成長速度を規定しており、年ごとに大きな変化がでないことが必要条件となる。いずれも現在のモンゴルの生態系の問題にかかわっている。過放牧が決定的なのである。1990年代にモンゴルの社会主義体制が崩壊し、家畜は住民の個人所有になった。そこから猛烈な勢いで家畜が増え始めている。降雨量はやや多目になっているようだが、問題は平均的な降雨量ではなく、局所的な豪雨と局所的な砂漠化である。フスタイ国立公園でも、緑地の維持については相当に資金をつぎ込んで実行されている。降雨量が少なくても育つ菜種を一面に植え、周囲を少雨に耐えられる緑地にしているようである。

3 文化の生存

人の移動と生活上の習慣が文化を形成する。20世紀は、「国家の実験」の時代であったために社会の仕組みは、大幅に変わって行く。清朝は基本的には満州族の国家であるが、満州そのものにも漢人が大量流入し、そうした漢人たちはさらに北上して、内モンゴルで農耕を進めていった。内モンゴルは、現在中国の自治区である。人口密度の低い地域は、ひとたび動乱が起きれば、いつも逃げ場になってきた。ロシアで革命が起きれば、既存の政治的勢力は赤軍に追われ、シベリアの白軍はモンゴルに逃げ込んでいる。周囲でそうした騒動が起きれば、モンゴル国内でも改革の動きが出て、1911年に中国の辛亥革命で清朝が倒れると、モンゴルでもこの年の12月にはモンゴル独立が宣言され、モンゴル政府が樹立された。

そもそも司法・行政機構は、清朝が持ち込んで官僚機構は形成されており、国家というファンタスティックな象徴としては、チベット仏教の活仏が設定されていた。そうなるに国家というまとまりもあり、官僚機構の仕組みもあり、あとは行政府のスタッフが決めればよい、という皮袋に水を注ぐだけの状態になっていたのである。

こんなときは暗躍する者たちが出る。オタイはロシアの財政援助に頼ったあげく借金がかさみ、それを清朝に肩代わりしてもらって、その後清朝への反乱を起こして、外モンゴルに逃げ込んでいる。ハイサンは反漢暴動を組織して官憲に追われ、外モンゴルに逃げて、王侯貴族を次々と説得し、独立国家の必要を説いていた。外モンゴルは、すでにそこに住みついていた各部族代表の王侯貴族と亡命革命家のたまりのような状態だったと考えられる。つまり独立国家形成のための必要条件は、ほとんど整っていたのであり、あとは機会だけだった。

こうしてボグドハーン(聖なる皇帝)モンゴル国ができあがるが、モンゴルの周辺で勢力を広げようとしていたロシア帝国、中華民国、日本ともこの国家を承認していない。唯一例外的にチベットとの間で相互承認条約を結ぶことができた。実質的には中華民国の支配が続いた。ロシア革命以降、モンゴル人民党はロシアの支援を得て、中華民国軍、白ロシア軍を撃破して、ようやく外モンゴルの独立を確保したというのが実情である。この後一時日本の関東軍がこの地を支配するが、終戦とともにそれも終わっている。

国家というまとまりは不思議な仕組みで、現実の個々の行政単位でもなければ、民族の集合体でもない。ましてや短期間で変貌していく市民社会の集合ではない。何か人のまとまりを維持するさいに、個々の人々の集合やネットワークとともに、同時にそれらを超えたそれらとともにあるイメージ的なまとまりが出現する。このまとまりの場所は、特定の象徴が埋めていたり、歴史的な事実で埋められていたり、伝説によって埋められていたり、その他なんでもありのような場所なのであろう。そうしたなんらかのもので埋めることのできる場所が、国(近代ではネーション・ステイツ)と呼ばれるものであるようだ。現実の社会的ネットワークの作動とともに、その作動にファンタスティックに伴う独

特の二重作動のようである。近代的な国家の必要条件が、国民、領土、主権である。ただしこれでは機能化した行政区分に重なってしまう。

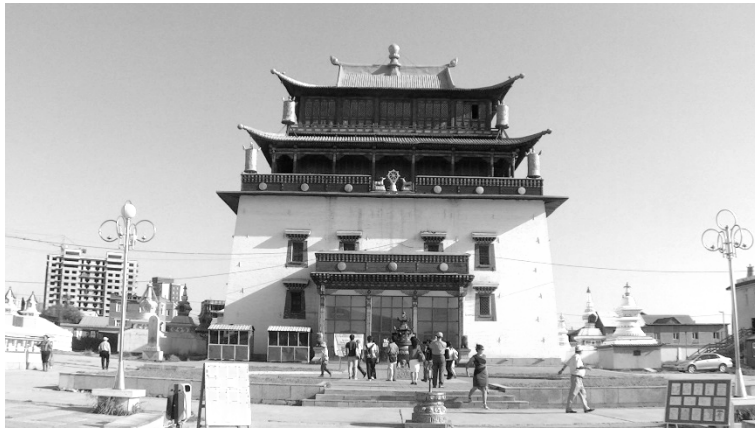
モンゴルでは、国家という場所が「ボグドハーン」のように具体的な輪郭をもった、まとまりをあたえるイメージとなっている。歴史記述をつうじて歴史が国のこのイメージを支えると考えている国家は、東アジアには多い。実際に多くの民族が覇者であることを競い、現実には支配者の交代が行われた国では、現在を理由づけ現在を正当化するものは、歴史なのであろう。おそらくこうした国では歴史の意味がいくぶんか異なっている。東アジアの国々が、歴史認識というとき、個々の歴史的事実認定が問題になっているのではない。歴史こそが現在の理由だという主張である。そして日本は、このことがピンと来ないのである。この点では日本は東アジアの例外だとも思える。日本の歴史は、まさにいま、あるいは未来への予期によって形成されるのである。これだけ歴史の意味が異なれば、個々の事実認定ではなく、また歴史観そのものではなく、むしろ歴史という経験が異なってしまう。



ザイサン・トルゴイ

ウランバートルにも歴史的記念碑と呼ばれるものがいくつかある。市内の小高い丘には、ロシアとモンゴルが共同して立てたノモンハン勝利記念碑が建っている。ザイサン・トルゴイである。

しかしモンゴルのようにこれだけの自然をもてば、歴史がごく短期的な最近の人間の営みのようにも見えてしまう。自然から見れば、歴史とはある意味での測定誤差である。モンゴルの歴史観について聞く機会はなかったが、感触として東アジアとは異なる印象がある。歴史と現在の間には、そこに地平のように浸透している自然がある。



ガンダン寺

この自然は歴史の固定を回避し、歴史の弾力の回復に寄与するはずである。歴史とはつねにすでに引き受けてしまっているものであり、誰もそこから免れることはできず、作為的に変えることもできない。また歴史によってもたらされた帰結には、誰も責任が付きまとう。だが何かの理由や根拠となる固定点ではないはずである。モンゴルにも歴史的記念碑は存在するが、むしろ住民の生活と地続きになったような文化的な記念碑があるに違いない。それがチベット仏教系の寺院である。

ウランバートル市内に、チベット仏教の総本山のようなガンダン寺がある。1938年に共産主義者によって壊滅的に破壊され、その後再建されたお寺であり、そのなかに巨大な仏像が収められている。この破壊は徹底したもので、900の修道施設が破壊され、夥しい修道士が殺害され、5つのお寺の建物が燃やされている。破壊前のお寺の跡は、再建されたお寺の前庭部に柱が1本残されているだけである。1990年以降のモンゴル民主化のあと、仏教の活動のための寺院が再開された。出家信者も多いようで、このお寺を中心にして修行のためのセンターのようになっている。モンゴル初代活仏ザナバザル(1635 - 1723)は、アーティストでもあったらしく、多くの絵画、彫刻を残した。こうした作品が一堂に集められ、美術館として1966年に開館している。いずれにしろモンゴルの文化の感触を掴むためには、やはり3か月ほど暮らしてみなければ、分からない部分がありそうである。

参考文献

石井祥子他『草原と都市 変わりゆくモンゴル』（風媒社、2015年）

萩原守『体感するモンゴル現代史』（南船北馬舎、2009年）

バトバヤル『モンゴル現代史』（芦村京、田中克彦訳、明石書店、2002年）

藤田昇他『モンゴル 草原生態系ネットワークの崩壊と再生』（京都大学学術出版会、2013年）

（視察日程 2015年8月24—28日）